

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

本研究所には幸島野外観察施設があり、草分け時代からすれば、すでにはば30年の研究史を有し、完備した個体追跡資料を抛り所に、多彩な研究がつづけられてきた。その学問的寄与は甚大であり、今後さらに発展が期待される。しかし一方ニホンザル本来の生息条件からすれば、孤立した1群が、約30ヘクタールに生息するという箱庭のサンプルであることは否めない。多くの群れが連続分布し、群間関係をふくむ多様な生活が営まれるところこそ、ニホンザルが進化をつづけ、適応している舞台である。

幸島以外でも、高崎山・嵐山はじめ多くの野猿公苑、また餌づけされない純野生群についても観察等が行われ、相補って研究を進展させてきた。しかし野猿公苑は、一部を除いて研究者の管理外にあり、餌づけという条件以外にも、無数の限界があった。一方純野生群は、近年の森林開発と、それに関連ある害獣化のもとに、年間捕殺数2,000頭という数字が示すように、まことに不安定な状況におかれ、計画的研究が保証されない。

かかる状況下に、典型的なニホンザル生息地を、その生息環境とともに確保し、理想的な半永久的研究を可能にすべきだという、切実な願望がおり、この研究林構想が打ち出された。

対象にしたのは、管理が国の責任で行われている国有林とし、ニホンザル分布の北限である下北、南限である屋久島、そして中核部としての中部、これには多雪の表日本型を代表する上信越、寡雪の表日本型を代表する木曽を選び、計4ヶ地点がとりあげられた。それとともに各地点での準備的研究も開始されたが、昭和48年度に下北に特別事業費予算がつき、53年度に上信越がというように、その実現は遅々たるはこびとなっている。しかし4研究林の実現は、ニホンザル野外研究を確実にする必須条件と考えており、将来幸島野外観察施設を発展解消し、5ヶ所から成るニホンザル野外研究施設を設けることは、本研究所の重大な任務であり、将来の野外研究の主軸を形成することであると、決意ならびに抱負を抱いている。

1. 下北研究林

下北半島には、4群から成る南部の個体群と、3群から成る北部の個体群があり、これら両地区のサルの群れ、個体数、各群の遊動が明白になったのは、主として研究林予算によっており、足沢貞成・東滋を核とする継続的な遊動追跡の結果である。

この極限地のニホンザルは、とくに条件のきびしい冬季において、ブナ・ヒバ混合林のみを利用し、海拔400m以上のブナ純林はまれに通過するだけ、また天然2次林（落葉広葉樹）や人工林（スギ）も生息に役立たない。この生態的特性にもとづき、国有林施業がサルの存続を可能とする形で行われるよう、森林生態学者の参加をえて、営林局との間で検討が行われている。

北部つまり研究林内での生息密度は、平方キロあたり1.2～1.3頭の間で非常に薄く、群れの遊動域は20平方キロに達する。この極限状況での人口動態が過去に加えて今後もトレースされるが、頻発する分群行動の実態、サルによる環境評価、その他多くの当面の問題が解かれつつある。

2. 上信越研究林

下部で2メートル、上部で6メートルの積雪を記録する典型的豪雪地で、ブナ帯を中心に、原始植生のよく残る魚野川流域、伐木がほぼ終り、川沿い植生だけが保護された雑魚川流域、もと新炭林で2次林が発達してきつつある横湯川流域の3相が含まれ、比較が可能である。餌づけ群を含む横湯川流域での研究史はすでに長く、他の地域についても予察がくりかえされてきた。研究費による基地建設は、これまで困難であった魚野川・雑魚川方面での研究に狙いをつけて行われている。臨床、生理、形態、生態、社会の5分野からの、適応問題の総合調査は、横湯川の諸群についてこれまでに3回（第3回が54年2月）行われたが、基地ができるので、純野生群についても行われることになる。この他に植物環境、とくに森林及びサルの食物の生産量測定を54年次から開始し、長期継続することになる。観察を主とする生態・社会的資料と、以上の方法による資料とを総合し、上述の3相をも考慮しつつ、この地区でのサルの生物的適応の究明が、当面の目標となっている。

3. 木曽研究林（候補地）

ニホンザルの最大高度記録2,600mを有する中央アルプスの西斜面で、上松町と大桑村にわたる

研究林予定地内だけで5群,さらに隣接区への連続した分布が確認されている。表日本型自然の代表で,高度適応にも興味があるが,研究所から2時間以内に到達でき,すでに学生実習にも利用されている。これまで10次延31人による予備調査が行われており,同日に3群を観察するなど,遭遇率が高く観察が容易なことも注目される。1,900ヘクタール中98%が保安林で無施業区,林相は原始林に近い。個体識別も間近に行われるであろうし,予算がつきしだい,急速な研究の進展が期待できる。

4. 屋久島研究林(候補地)

唯一の亜種であるヤクニホンザルが,さいきんまで島一円に濃密分布していたが,そのおかげは島の西北に残るのみ。辛うじて保存されることになった約1,300ヘクタールの候補地には,今では稀少価値となった照葉樹林の代表的植生が見られ,9群以上が生息する。昭和48年以後調査が行われているが,とくに50年以降けいぞく観察が行われ,餌づけされないニホンザルとしては,これまでもっとも精度の高い研究となってきた。個体識別もかなり進んでいる。この貴重な研究地を確保し,安定した長期研究をつづけるため,研究林としての体制整備が不可欠と考えられる。

(川村俊蔵)

大 学 院 学 生

昭和58年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類分科の学生,指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏 名	学 年	指 導 教 官	研 究 テ ー マ
渡辺邦夫	D 3	川村 俊蔵	メンタウエイに生息する霊長類に関する比較社会学的研究
菅原和孝	D 3	河合 雅雄	ヒヒ類の種間関係についての社会学的研究
平石邦義	D 3	川村 俊蔵	霊長類の生態学的研究
松村道一	D 3	久保田 競	霊長類の随意運動の制御におけるシナプス機構の解析

B.S. グレワル	D 3	河合 雅雄	ニホンザルにおける活動様式と行動の社会生態学
J. ブルトン	D 3	川村 俊蔵	湯河原におけるニホンザルの社会行動および社会構造の分析
十川和博	D 3	高橋 健治	霊長類の組織タンパク質の分解機作の研究
浜田生馬	D 3	久保田 競	皮質運動ニューロンの準備的活動の研究
丸橋珠樹	D 2	河合 雅雄	ヤクザルの社会生態学的研究
森山昭彦	D 2	高橋 健治	霊長類のタンパク分解酵素の性状の研究
伊藤真一	D 1	久保田 競	注意発現の神経機構の研究
川本 芳	D 1	野澤 謙	遺伝的変異よりみた霊長類の系統に関する研究
小島哲也	D 1	室伏 靖子	ニホンザルの個体認知行動の実験的分析
松本 真	D 1	江原 昭善	霊長類の顎・顔面頭蓋の形態学的研究
川合恭子	M 2	近藤 四郎	霊長類足骨に関する形態学的研究
船橋新太郎	M 2	久保田 競	スキルネスの神経機構の研究
藤田和生	M 2	室伏 靖子	ニホンザルの概念学習に関する実験的研究
今井一郎	M 1	田中 二郎	沖縄県西表島における狩猟,漁撈,採集
浜田 穰	M 1	近藤 四郎	ニホンザルおよびその他のマカクの形態形成
星野次郎	M 1	河合 雅雄	ニホンザルの群におけるオトナオスの役割